

大学病院に勤務して感じること
平川晃弘 (名古屋大学医学部附属病院)

「平川さん、とにかくここで成功してください。」

これは、私が名古屋大学医学部附属病院(名大病院)に赴任して間もない頃に、ある教授から掛けられた言葉です。最初は「何を達成すれば成功になるのだろうか」と自問していましたが、赴任して 1 年が経過した今、教授の言う「成功」の意味が少しだけ分かったような気がします。本稿では、医学・薬学分野において生物統計学がどのように認識されているのかを考え、大学病院で統計家として「成功する」とはどういうことなのか、僭越ではございますが、私の経験に基づく意見を述べたいと思います。

私は、医薬品医療機器総合機構(PMDA)で、治験相談・承認審査業務に 5 年間従事しました。PMDA では医学・薬学・毒性・生物統計学の専門家から成る審査チームを編成して、治験相談・承認審査を行います。あくまで個人的見解ですが、審査チームにおける統計家の役割は、チーム内の医薬系審査員が認識・理解している「統計家の役割」によって大きく変わります。統計家の意見を医学・薬学からは独立した個別的なものとして捉える審査員もいれば、医学・薬学的判断に活かそうとする審査員もいます。前者の審査員は、統計学に対して苦手意識を持っている傾向があるようにも思います。当然、PMDA の統計家は医薬系審査員の判断あるいはレギュラトリーな判断に役立つ情報や意見を提供したいと思うわけです。これには、統計学に対する苦手意識、あるいは誤った理解をなくして、統計学の意義や役割について正しく理解してもらう必要があります。しかしながら、個人によって統計学の素養が異なり、さらに専門領域ごとに統計学の役割が異なるため、全審査員に同じレベルで理解してもらうことは容易ではありませんでした。審査員を対象に生物統計学のセミナーを始めるなど、効果的な方法について暗中模索しましたが、それらが奏功したかどうかはよく分かりません。そして、名大病院に赴任して思うことは、統計家の役割に対する認識・理解に関する同じような課題は大学病院にもあるということです。

近年、大学医学部・大学病院、ナショナルセンター、国立病院機構などにおいて、生物統計家のポストが増えています。これは、生物統計学の重要性が認知されてきた結果であると思いますが、他方で国が推進する臨床研究活性化事業が大きく関係しています。名古屋大学は、平成 24 年に厚生労働省の臨床研究中核病院整備事業と文部科学省の橋渡し研究加速ネットワークプログラムの対象に選定されました。これらの事業の対象機関の選考では、生物統計家の雇用状況が採択の可否に少なからず影響してくるため、応募を検討している機関は生物統計家を雇用しようとします。生物統計家のポストが増えること自体は大変好ましいことだと思いますが、他方でこのままでは統計家の雇用が形骸化してしまうのではないかと危惧します。統計家の役割について十分に認識・理解されないまま雇用されると、統計家に過剰な期待が寄せられる可能性もあるかと思えます。現在、様々な診療科の先生方と共同研究をさせて頂いておりますが、求められる役割は多種多様であり、私の力不足もありますが、統計家では対応できないような相談も少なからずあります。ここでも統計家の役割について正しく理解してもらうことが重要なのだと改めて実感しました。教授の言う「成功する」とは、予め決められた成功像に近づくことではなく、まずは統計家の役割について正しく理解して頂き、その上で組織内での統計家のプレゼンスを向上させていくことなのだと思います。

ここで述べたことは、私の経験に基づくものであり、製薬企業や他大学・機関では状況が異なるのかもしれない

ん. しかしながら, 産官学のいずれの機関においても, 統計家としての「成功」への第一歩は, 統計家の役割について正しく認識・理解してもらうことなのだと思います. もちろん, 統計家自身も医学・薬学の素養を高め, 当該分野の研究者の考えを理解した上で, 統計的観点からの意見・判断について分かり易いプレゼンテーションを心掛ける必要があります. 「成功」への道のりはまだまだ長いですが, いつの日か「彼を採用してよかった」と言われるように, 明日からも頑張りたいと思います.